



蘇りの地・熊野で 人生を見つめ直す

京の都より幾千もの森や峰を越え、ようやく辿り着いた熊野。その厳しい道程は歩くことすら修行である。「都人からすると、遙か南の彼方にある熊野は、得体の知れない空間であり、混沌とした自然は畏怖の対象でもあったと思います。それはいつしか信仰となり、少しでも神々に近づくために人々は熊野を目指し、その歩跡が熊野古道という参詣の道になったのだと思います」と語るのは、和歌山県世界遺産センター顧問の辻林浩さん。

今では整備され、歩きやすくなった熊野古道だが、辻林さんがセンター長に赴任した当時は、傷んでいる箇所も多く、どこが古道なのか判らない部分もあったという。「そこで有志を募って整備作業を行いました。それは単なる『道』の修復ではなく、数百年、いや千年先の人が発掘調査をした時に、どういう風に修復したのか判るような『道普請』です」。熊野古道は重要文化財であり世界遺産でもある。道普請はその価値を未来の人々に伝える手紙のようなものだ。

個別の自然崇拜に起源を持つ熊野三山。熊野の神々は分け隔てなく全ての人を受け入れた。「どうしてこんな山奥にこんな大きな神社ができたのか？ また忌み穢れという概念は太古から存在したはずですが、どうして熊野の神々は寛大なのか？ 熊野は今も判らないことだらけです」。道とは人と物が動く過程であり、そこに地域の人々の考え方や気質が、熊野信仰と混交したのかもしれない。

「是非一度は一人でゆっくり熊野古道を歩いてください。どうしてこんな山深いところを歩く必要があるのか？ どうしてまたここに来たんだろう？ 無心になりながらまた人生を振り返り考える。これこそが『蘇り』の過程であると思います」。



和歌山県世界遺産センター
顧問
辻林 浩
Tsujibashi Hiroshi

2007年に和歌山県世界遺産センター長となり、2019年に顧問となった辻林さんは、小学生の頃から考古学に興味を持ち、文化財保護の仕事に携わるようになった。

❶熊野古道の難所の一つ、小雲取越の途中にある百間ぐら。❷神倉神社の御神体であるゴトビキ岩。熊野の神々がこの岩に降臨したとされる。❸熊野本宮大社の旧社地である大斎原。❹那智大滝の源流である那智原始林。❺那智山信仰の根元である那智大滝。熊野那智大社別宮飛瀧神社の御神体。❻熊野九十九王子の一つ、継桜王子。後ろに立つのが一方杉。❼熊野古道中辺路のシンボリック存在の牛馬童子像。

